

## 『ダニエル・デロンダ』 22章を読む： オースティンの遺産とエリオットの創造

福永 信哲

The present paper aims at making clear how George Eliot owes a debt in style to Jane Austen in her character portrayal. Taking up Austen's *Emma* and Eliot's *Daniel Deronda*, we consider the qualities of prose style that are characteristic of the respective writers as seen in these novels. A comparative analysis of their discourses has brought to light a marked tendency on both sides to use negative expressions and the subjunctive. These common traits are surmised to meet an artistic challenge of creating ambiguity in the characters' psychological situations. Eliot, while inheriting Austen's stylized English, utilizes scientific phraseology to give voice to the human drama in late nineteenth century England. Thus she adds physiological dimensions to what Austen has established. We attempt to prove this point on the basis of discourse analysis.

**Keywords :** 『エマ』, 『ダニエル・デロンダ』, 曖昧性, 仮定法, 否定語

序 ジェーン・オースティンとジョージ・エリオット  
ジェーン・オースティン (Jane Austen, 1770-1817) とジョージ・エリオット (George Eliot, 1819-80) は、生まれ育った時代も階級も性格も大きく異なっている。オースティンは、産業主義の影響がまだ限定的だったイングランド南部の田園文化の中に生き、上流階級の女性に固有のたしなみ (accomplishment) を真の意味で身につけた作家である。ある意味で、イギリス古典主義の申し子といえる良識の人であった。一方エリオットは、旧秩序のシンボルたる貴族のエステートに生を享け、その領地管理を生業とする父親の深い感化のもとに自己を形成した。故郷のナニートンとコヴェントリでは新興の産業文明が広がりを見せ、新旧の秩序の葛藤が起こっていた。古い国教会の権威が、福音主義的な信仰復活運動の感化によって揺らぎを見せていた時代に多感な少女時代を過ごした。彼女の中には父親的な旧秩序への親しみとともに、福音主義的キリスト教の敬虔な宗教感情が息づいていた。この葛藤をさらに複雑なものにしたのが、進化論に象徴さ

れる科学的世界観の受容であった。深い宗教的心情と科学的批評精神が、彼女の魂のうちに相克していたのである。その意味で、19世紀後半のヨーロッパ時代精神をわが心のうちに演じていた。作家活動も、オースティンは1810年代にほぼ集中し、エリオットは1850年代から70年代にまたがっていた。その間のイングランドの変容は、物質生活と精神生活ともに未曾有のものだった。

これほど大きな隔たりのあるオースティンとエリオットであるが、二人の間には質実な伝統の継承があった節がある。エリオットは、古今のヨーロッパ語に造形が深く、ギリシャ古典、聖書、シェイクスピア、ロマン派詩人など古今の幅広い文芸に親しんでいた。とりわけ、ドイツ・ロマン主義運動と歴史主義的聖書批評の成果を自己のものとしていた。これほど視野の広い文芸修業を経た作家が、生涯の伴侶たるルイス (George Henry Lewes) とともに、オースティンの小説を繰り返し朗読しあって、その文体に親しんでいた。この事実、彼女が先達オースティンの業績に深い感化を受けた証と考えてよ

岡山大学大学院教育学研究科 社会・言語教育学系 英語教育講座 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1  
An Appreciation of *Daniel Deronda* Chapter 22: Austen's Heritage and Eliot's Innovation  
Shintetsu FUKUNAGA

Department of English Language Education, Division of Social Studies and Language Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

い。では一体、エリオットは、オースティンの言語感覚と文体のどのような秘密に心惹かれたのであろうか。本論は、この問題意識を基に両者の英語ディスコースを比較検討し、エリオットがオースティンから何を継承し、何を革新したかを検証することを目的にしている。

## I. オースティンのテキストが語るもの

英語という言語は曖昧さ (ambiguity) を尊ぶ伝統がある。オースティンの小説を原語で読む人は、アイロニーのぴりっと辛い味がいつから始まってどの言葉で終わり、どこから真摯な調子へ戻っているかを明敏に察知する感覚を問われる。一見淡々とした叙述とみえるものの中に、語り手の人間観察がそっと忍ばせてある。感情を抑制した文章の中に、登場人物の偏見混じりの見方が隠されている。これは、人物の心中に起こる言葉が平叙文の体裁をとって語られていることに由来している。こうして、話し言葉の直截な内容を叙述体でくるんではばかすのである。これが自由間接語法といわれる文体の技である。この技もまた、複雑曖昧な現実をそのままに描こうとする作家のアイロニーの精神 (ものの実態と見かけの落差を察知する感覚) から出たものである。

これとは対照的に、人物の生き生きとした話し言葉は、当事者の感情の色彩を帯び、その性格像がおのずから浮かび上がってくる。ところが次の瞬間には、語りの抽象的な文に語り手の射貫くような人物洞察が仄めかされる。このように、絶えず視点が語り手から人物へ、あるいは人物から語り手へと移動している。この技は、自負や偏見で濁りやすい感情の動きを、視点を変えてその本質を浮き彫りにする効果がある。これもまた、作家の創作ヴィジョンに由来する技である。すなわち、自己への無知は誰も免れない宿命である、とみる諦念と赦しの美学がそこに暗示されている。自己をあるがままに見ることができず、そのために、他者との関係に軋轢が生じる人間の悲しい性を眺める語り手のまなざしには諦念を感じられる。人はみな愚か者、それでいいじゃないの、お互いの愚かさを眺めて楽しみましょう—これがオースティンの喜劇的ヴィジョンである。

オースティンのテキストを陰影の深いものにしていうもう一つの要素は、言葉遣いに表れるジェンダーの意識である。19世紀初頭の貴族・ジェントリの世界は、すでに触れたように、性別の役割意識と礼儀作法が暗黙のうちに生きていて、期待される規範のなかで自己と折り合いをつけることが「たしなみある」(accomplished) 女性の誉れであった。これは、イギリス人の保守的自由観の勘所を言い当て

ている。確立した伝統の基盤のうえに制約を甘受しつつ、これを内的に乗り越えて、自明の世界を楽しむ様式美がある。この微妙な境地は、日常の瑣事に表れる人間の愚かさや矛盾を眺めて楽しむ喜劇的精神に固有のものである。

イギリス英語には、風土と歴史に由来する意味のこだまが隠れている。記憶と美意識を共有する人々がそっと楽しむ言葉の綾がある。これを熟読玩味する読者には、作品テキストの背後に作家の統一的ヴィジョンが生きていることが悟られてくる。これを端的に言えば、タナー (Tanner) が指摘するように、言葉が真の目的に沿って使われることが自己を知る鍵になるという確信である。

Jane Austen enacts and dramatises the difficulties, as well as the necessity, of using language to proper ends. Just as thoughtless or perverse use of language can be the most insidious destroyer of the human, so the most responsible employment of language (and at times silence) not only makes for the dignity of the human but has powers and strengths of salvation. (6)

真に自己に根づいた言葉を使うことは難しい。自ら気づかない偏見や気どりで言葉は濁る。言葉の濁りは自己と世界との調和を乱すもととなる。ここに、作家がアイロニーを多用する秘密がある。絶えず視点を移動して、単一のものの見方から複眼的な見方へ、という動きが語りの技法にみられる。自己の思いをさておいてもものを見る眼が開けてくると、他者から見たおのれの姿がみえてくる。同時に、自分が語った言葉が自己憐憫と自負でゆがんでいた事実気づく。この体験が、エマ・ウッドハウス (Emma Woodhouse) やエリザベス・ベネット (Elizabeth Bennett) のようなヒロインにも描きこまれている。

オースティンの小説テキストを行きつ戻りつ吟味しながら、隠れた陰影を発見する喜びは、翻訳では味わえない醍醐味である。曖昧な言葉の綾を楽しむイギリス文学の古典を読むことは、作家に招かれて解釈という行為に参加することである。とりわけ、オースティンのテキストには曖昧さとほかしがあって、読者は文脈に聞き耳を立てることを誘われる。人物の偏見混じりの見方の行間から、ものの実相が見え隠れしている。外観と実態が一致することは稀なことではあるが、人物に時折気づきの瞬間が訪れる。その瞬間に、人は生きた言葉をもつことになる。タナーによれば、見かけと全真実の隔たりにオース

ティンは繊細な感受性をもち、この鋭敏な現実感覚が達意の言葉を織り出す原動力になっているという。(207)

## Ⅱ. 『エマ』第3章：風土描写の妙味

『エマ』(*Emma*) 3章の冒頭に見られる語りには、オースティンの熟練の技が仕込まれている。ヒロイン・エマを取り巻く幾人かの人物に焦点が当たり、彼女が生きる歴史風土と人間関係が浮き彫りになっている。

Real, long-standing regard brought the Westons [Mr. Weston and the former Miss. Taylor] and the Knightley; and by Elton [the curate of the Anglican Church], a young man living alone without<sup>1)</sup> liking it, the privilege of exchanging any vacant evening of his own blank solitude for the elegancies and society of Mr. Woodhouse's drawing-room and the smiles of his lovely daughter, was in no danger of being thrown away.<sup>1)</sup>(19)

段落始めの“Real, long-standing regard”に始まる文は、お互いに気心の知れた密接な人間関係で人と人とがつながっていることを示唆している。語順が心理的観点から慎重に配置されているのは、オースティンの英語の特徴である。「長い親交で培った好意」があって、人は気兼ねなくより集うことができる。“real, long-standing”といういかめしい形容語句がいきなり文頭に来ることによって、読者の注目が引きつけられるように言葉が配列されている。

2番目の文で、牧師補のエルトン師が導入される。文頭の“by Elton”は読者の興味を引き延ばし、最後に納得させる心憎い技である。エルトン師が、文の最後に至ってはじめて“the privilege... in no danger of being thrown away”の受身動詞の主体だとわかるような語順の配置である。その間の情報は、語り手の女性的な直感でえり抜かれた言葉によって読者に伝えられる。“vacant evening of his own blank solitude”独身の牧師補は、当時の社会通念からいえば、町の霊的エリートである。ところが、“vacant”と“blank”の形容語句が宗教者に使われると、因習に安住した怠惰な生きざまを連想させる。若い宗教指導者が所在なく退屈な夕べを過ごしている図には意外性があって、その人間性について読者の好奇心をそそる。“a young man living alone without liking it”は、独身男性が淋しさを感じ、早く結婚できないかな、という心の眩きが聞

こえてくるような句である。彼の楽しみは、ハートフィールド館 (Hartfield) の応接室での若いヒロイン・エマとの語らいである。“being thrown away”の受身による主体のぼかしは、作家のおとぼけである。“the privilege”なる誇張された言葉と二重否定の組み合わせから、読者は、彼が館の女あるじに淡い期待を寄せている状況を察することができる。

19世紀初頭の国教会は、貴族主導の伝統的な身分社会は揺らぎを見せていたが、命脈をかりうじて保っていた。牧師の任免権は形式的には教会にあったとしても、実質的には教会のパトロンの意向に左右されていた。地縁、血縁の絆で牧師の任免が左右されたことから察せられるように、国教会の権威主義と因習化は広く見られたのだ。オースティンは、牧師の娘だけあって、教会の内実を熟知していた。自然なりゆきとして、建前と実態のギャップを察知するところに作家のコメディ感覚が生きている。エルトン (Elton) のような人物が牧師として通用していた歴史的現実をうかがい知ること、オースティンの小説を読む楽しみの一つである。

## Ⅲ. 性格描写の背後に隠された時代を見る眼

オースティンの小説の舞台は、ほとんどの場合、田舎の伝統的共同体である。静穏無事な暮らしの点描の積み重ねが彼女の小説世界をなしている。ゴダード夫人描写(『エマ』3章)もそういう点描の一つである。

Mrs. Goddard was the mistress of a School—not of a seminary, or an establishment, or any thing which professed, in long sentences of refined nonsense, to combine liberal acquirements with elegant morality upon new principles and new systems—and where young ladies for enormous pay might be screwed out of health and into vanity—but a real, honest, old-fashioned Boarding-school, where a reasonable quantity of accomplishments were sold at a reasonable price, and where girls might be sent to be out of the way and scramble themselves into a little education, without any danger of coming back prodigies. (21)

ゴダード夫人の古風な気質と教育方針にも、作家の宗教的ヴィジョンがのぞいている。19世紀当時いきおいを得た信仰復活運動の息吹は、国教会から

下層の非国教会派会にまで広がりを見せていた。その禁欲的理想主義は、時代の蛮風を肅清し、勤勉に働くことを重んじる時代精神に合致していた (Trevelyan, 350-51)。ホートン (Houghton) によれば、19世紀初頭以後、信仰喪失の危機の広がりにつれて、敬虔を尊ぶイングランド中産階級の「勤労の教え」 (the gospel of work) が、人生の意味を発見する契機として見直されたという (251)。上掲の一節には、支配的な旧秩序のなかに新しい息吹が芽生えている歴史的現実が捉えられている。

オースティンの生まれ育ったジェントリ (gentry) の文化には優雅と洗練が伝統的に流れている。その宗教的な基盤は18世紀的寛容主義 (latitudinarianism)<sup>2)</sup>である。その宗教観は良識 (good sense) と現実主義に裏打ちされていた。セシル (Cecil) によれば、人間はみな愚か者たることを免れず、そういう不完全な人間をあるがままに眺めて楽しめばよいではないか、という感覚が古典主義時代にあったという。(15)<sup>3)</sup>ゴダード夫人の性格描写にも、作家の古典主義的な人間観が反映している。

上掲引用の1行目の“not”から4行目の“but”までの文には、信仰復活運動の禁欲的理想主義にたいするオースティン自身の見方が反映している。

“which professed, in long sentences of refined nonsense, to combine liberal acquirements with elegant morality upon new principles and new systems” 美しい言葉が高らかに謳われると、作家の身についた懐疑心が黙っていない。いきおい、皮肉な調子を帯びてくる。“liberal acquirements”, “elegant morality” 時代の要請に応える女性の「たしなみ」と「優雅な徳目」の謳い文句に、「新しい」の形容語句が重ねられている。作家は、美辞麗句をはにかみもなく使う人の言語感覚にうさんくさいものを感じている。“where young ladies for enormous pay might be screwed out of health and into vanity” これらの言葉から伝わってくるものは、裏返しにされた作家の人間観である。人はあまりに高い理想を掲げると、現実には裏切られますよ、あるていど愚かさを許容しましょう。禁欲の行を若い少女に課して、心身のバランスが崩れてしまうと、命が粗末になりますよと。

“a reasonable quantity of accomplishments were sold at a reasonable price, and where girls might be sent to be out of the way and scramble themselves into a little education, without any danger of coming back prodigies.” 反復された“reasonable”には「ほどほど」を重んじる作家の

価値が仄めかされているが、前者には軽いアイロニーが感じられる。“out of the way”にも、保護者への皮肉なまなざしがある。“scramble themselves into a little education”の言い回しには、当時の女子教育の微温的な空気が暗示されている。ゆっくりと時間をかけて本物の教養を磨くのではなく、そそくさとあてがい扶持の知識を注入される様子が見てとれる。“without any danger of coming back prodigies”この文脈の“danger”は、親の利害が混じった先入観が暗示され、これが誇張された「神童」 (“prodigies”) と相まって、語り手の茶目っ気が行間から伝わってくる。

この一節に見られるように、オースティンは古風な価値の世界に心地よさを感じる一方で、そこに根を張っている因習が個人の自覚を阻んでいることにも批判の眼を向けている。特に、当時の女子教育に真の教養を育む視点が欠けていることがほのめかされる。

Mrs. Goddard's school was in high repute—and very deservedly; for Highbury was reckoned a particularly healthy spot: she had an ample house and garden, gave the children plenty of wholesome food, let them run about a great deal in the summer, and in winter dressed their chilblains with her own hands. It was no wonder that a train of twenty young couple now walked after her to church. (21)

ゴダード夫人の古風な気質と教育方針は、18世紀古典主義の古風な知恵を残している。人が育つには健全な生活があってこそという信念である。この信念を語り手が共有していることは、“deservedly”という副詞が暗示している。「ゆったりとした家と庭園」があって、しっかりと食事をとった少女たちは、夏には戸外を駆け回るほど元気である。冬には寒さで霜焼けになった彼女たちを手塩にかけて治療してやっている。そういう人情味が教師と生徒の信頼関係を育んでいる。こうした情のつながりが、おのずから教会の宗教的絆の基盤となってゆく、とみる暗黙の認識がある。生活の質の健全さが良識的な宗教感情を育む土壌だとみる見方は、作家自身の境地を反映している。

トリリング (Trilling) によれば、オースティンの作品世界には近代的自我意識と相競うような牧歌的世界があるという (133-34)。人が自然や自己と調和し、素朴な安らぎのうちに生きられる世界への憧憬が作家のなかにあり、これが変転極まりない近



代の憂いのなかで、理想郷として機能しているという (132)。翻って、オースティンのなかに息づく安息と慰みへのあこがれは、禁欲的克己主義への懷疑となって表れてくるとみることでもある。

人と人とが古い絆で結ばれた共同体での、つましいながら心安らかな暮らしは、ゴダード夫人の体現する生きざまである。

She was a plain, motherly kind of woman, who had worked hard in her youth, and now thought herself entitled to the occasional holiday of a tea-visit; and having formerly owed much to Mr. Woodhouse's kindness, felt his particular claim on her to leave her neat parlour hung round with fancy-work whenever she could, and win or lose a few sixpences by his fireside. (21)

貴族のジェントルマンとレディに対する敬意と親しみは、イギリス人の古い本能である。ゴダード夫人にもこれがあって、ティーとおしゃべりがなによりもの慰みである。“having owed much”と“his particular claim on her”は相響きあっている。一方の温情と他方の感謝は深い絆となっている。「ほかならぬ館の主人からお声がかかれば、何はさておいてもこれ応えたい」という気持ちである。“claim”という言葉は、辞書的には「要求する資格」と解されるが、この文脈では「報恩感謝」の古風な含みを湛えている。これも言葉の辺境を開拓し、多層的な意味を自在に紡ぎ出す作家の技である。

心の共同体の成員が太い絆でつながって、自分の位置を与えられ、そこに自足の喜びを見出している。そういう落ち着いた生活をしている人々にオースティンは共感し、彼らの見せる悲喜劇にアイロニカル・ヒューモアの源を見たのである。オースティンが描く世界は、田舎のジェントリを取り巻く小さなものである。しかし、そういう世界にも世の有為転変が忍び寄っている。土地をすべての基盤とする旧秩序と、産業主義を基盤とする宗教的熱狂の葛藤がある。作家は、世の動きが個人に及ぶさまを実に的確にとらえている。だからこそ、彼女の小説世界は時代の現実を映し出しているのだ。

#### IV. エリオットにとってのオースティン

ハンドリーによると、ジョージ・エリオットは『牧師たちの物語』(*Scenes of Clerical Life*, 1857) 執筆の頃、オースティンのほぼすべての小説を音読していた。『ダニエル・デロンダ』(*Daniel Deronda*,

1875-76 以下 *DD* と略称) 執筆の頃にも、再び円熟期の『説得されて』(*Persuasion*, 1818), 『エマ』, 『マンズフィールド・パーク』(*Mansfield Park*, 1814) の朗読を楽しんでいたという (18)。これは察するに、エリオットがオースティンの語りの技法に深い共感を寄せていたことに由来するものであろう。ものの見かけと実態の違いを鋭敏に見分け、これを達意の言葉で表現するオースティンの心理的リアリズムはエリオットのものに相通じている。

オースティンとエリオットの英語を読み比べてみると、真の言葉を探り取るまでは決して納得しない感受性が両者にある。人格の完成にいたる歩みを照らしてくれる真正の言葉を手探りすることが、二人の女流作家の小説作法として共通している。曖昧なものを曖昧なままに捉えようとする明敏な言葉の感覚も二人は共有している。この感覚が否定語の積みかさねを無意識のうちに求めたのではないか。ハンドリーによれば、彼女たちに共通する技法として、おかしみを感じる嗅覚、描写の正確さ、語句の選択の確かさ、言葉のニュアンスに対する鋭敏な感受性、真実な対話を聞き分ける耳、道徳的価値に対する勘、小説言語を芸術的に昇華する熟練の技、を挙げている。(19)

では、これらの技はエリオットではどのように生かされ、オースティンの遺産はどう継承されているのだろうか。さらに、『エマ』からはほぼ60年を隔てた *DD* に、その間の時代の変容がどう反映し、どのような創造がなされたのであろうか。以下、*DD* 22章を例示しながら、言語事実によって裏づけてゆく。

#### V. *DD* 22章：エリオットの言語実験

*DD* には、デロンダをとり巻くユダヤ人物と、ヒロイン・グエンドレン (Gwendolen) を軸とするイギリス人物があざなわれている。作品の時代背景として *DD* は、ジョージ・エリオットの生きた時代 (1860年代と察せられる) を描いている。彼女は主要な小説としてははじめて、現代という時代の姿を作品の鏡に映しだし、これと向きあったのである。この試みは、作家がみずからの時代をどう捉え、自己をどう確認するかという模索の一環であったことが察せられる。らせん状に織りあわされたイギリス文化とヘブライ文化の触れ合いと対話は、作家が祖国の現状を振り返り、ヨーロッパ文化の歴史的伝統のなかに位置づける意味で、貴重な視座を提供することとなった。作品の22章は、イギリス上流社会の風土を一人のユダヤ人の目で洞察したものである。そこに、エリオット自身が自国文化を批判的

に振り返り、再生を期そうとするまなざしが感じられる。

エリオットの見るところ、19世紀後半におけるイギリス社会の宗教的伝統は、その本来性を失いつつあり、さまざまな世俗的価値と結びついて抑圧的な因習と化している。上流階級も中産階級も物質的繁栄の中で、精神文化の根から切り離され、自己満足の風にひたりきっている。これが人々の精神と行動を縛る桎梏となって、個人が生きた信仰によって人格的成熟の道をあゆむのを阻んでいる。いきおい、形骸化した伝統と制度のなかで真の動機を喪失した人物を洞察する描写には、切れ味鋭い風刺精神が躍如としている。一方これを打破し、精神と言葉の蘇生を図ろうとする系譜の人物描写には、作家の、時にロマン派的な、時に科学的な、有機的生命観が反映している。

DD 22章は、貴族の女後継者キャサリン・アロウポイント (Catherine Arrowpoint) と、彼女の音楽教師クレスマー (Klesmer) の結婚に至るいきさが描かれている。イギリス上流の保守的秩序に生まれつきながら、その風土へ鋭い批判の目を向ける若い女性と、流浪のユダヤ人の生きざまの対照が活写されている。これは、作家が異文化の視点から自国文化を顧みようとしたDDのテーマを象徴するプロットをなしている。

由緒正しいアロウポイント家の家督を相続する立場にある一人娘キャサリンは、否応なく結婚をめぐって世間の思惑の的になる。彼女との縁組を画策する野心家は、その大身代と身分的権威を基盤に爵位へ、政治家へ、の道を思い描かずにはおれないのである。

Heiresses vary, and persons interested in one of them beforehand are prepared to find that she is too yellow or too red, tall and toppling or short and square, violent and capricious or moony and insipid; but in every case it is taken for granted that she will consider herself an appendage to her fortune, and marry where others think her fortune ought to go. Nature, however, not only accommodates herself ill to our favourite practices by making “only children” daughters, but also now and then endows the misplaced daughter with a clear head and a strong will. (219)

貴族文化には歴史によってその妥当性が証明された慣習がある。土地所有が伝統と権威の源である。そ

の基盤を揺るがすことは、自らを否定するに等しい。上掲の引用の最初の二つの文は、一人娘が、その人間性とは無関係に、世間から結婚の尺度をもって測られる構図を浮き彫りにしている。語り手は、そっと身を隠して、婿入りしようという男性の下心を言葉にしている。“Heiresses vary”は言葉の節約によって切れ味が鋭い。世の若い男が深窓の令嬢を鵜の目鷹の目で見るとを皮肉っている。“she is too yellow or too red, tall and toppling or short and square, violent and capricious or moony and insipid;” 名望家の世界の内部には裏表があるのが世の常である。権威のヴェールにおおわれた令嬢の実態をあれやこれやと思いめぐらす興味本位のまなざしが、ペアの言葉の畳みかけでひょうきんな音楽性を奏でている。“she will consider herself an appendage to her fortune,” 二番目の文の中にあるこの語句は、財産が結婚の絆の重しとなる現実を穿つ的確である。周囲のだれもが口にはしないが、心底で思っている「常識」が率直な言葉によって可視化されている。

“Nature, however, not only accommodates herself ill to our favourite practices by making “only children” daughters,” 最後の文は、語り手が世間の「常識」に揺さぶりをかけている含みがある。“accommodates herself ill”のラテン語源の言い回しが示唆するように、自然は、人間が自分の都合にしたがって築きあげた習慣を覆すのになんの躊躇もないのである。ここに作家の時代認識が端的に反映している。自然は、人の思いよりはるかに複雑微妙なとなみを行っているのである。自然の外に超越的な予定調和の霊があるのではなく、そのしくみのなかに人智を超えた神秘が生きている。物質界と精神界に働く不変の法則 (“R. W. Mackay's *The Progress of Intellect*,” 21) は、個人の心身にも生きている。これが、ダーウィン (Darwin, 1809-82) 以後の進化論の自然観である。エリオットは地質学、生物学、考古学の知見を精力的に吸収し、小説の言語に生かした。上記の一文は、作家の社会風刺が地球的時間<sup>4)</sup>のいとなみの視野に裏づけられていることを暗示している。

“endows the misplaced daughter with a clear head and a strong will.” 作家の皮肉なまなざしは、“misplaced”という進化論の言葉で読者の意表を突く。「環境に適應できない」個体は自然から淘汰される。キャサリンは自分の生まれ育った風土の一面になじみながら、他面で、個人の自覚の深い人物である。自分の属する階級の「良識」ではなく、真の教養を求め、手探りする過程で、ユダヤ人クレス

マーに出会ったのである。風土との葛藤のなかから、個人の良心に従って真の自分を発見しようと苦闘してきた女性である。天賦の才が環境との不調和を起こし、葛藤に突き動かされて広い世界にとび出してゆく、これがキャサリンの人生の皮肉である。その意味で、彼女は、エリオット自身の面影を偲ばせる人物である。

キャサリンとクレスマーの恋を描く描写には、エリオットのロマン派的な感受性が息づいている。二人が身分のちがいをのりこえて結婚へと突き進んでゆくプロセスは、作家の耽美的な官能描写と相まって、個人の背後にある社会風土の深い洞察を示している。二人は、音楽への愛をとおして人間的に共感しあうようになったのである。クレスマーは、頼るべき伝統的な権威もなく、ただひたすら芸道に献身して独自の芸境を身につけていった。彼は雇われ音楽教師として、イングランド上流の人々の眼に自分がどう映っているかを察知している。したがって、彼らの共感には、はじめから打算の入る余地がなかった。

アロウポイント家の館クェッチャム(Quetcham)での社交パーティで、キャサリンとクレスマーが人目を忍んでお互いの気持ちを探りあう場面がある。

There is a charm of eye and lip which comes with every little phrase that certifies delicate perception or fine judgment, with every unostentatious word or smile that shows a heart awake to others; and no sweep of garment or turn of figure is more satisfying than that which enters as a restoration of confidence that one person is present on whom no intention will be lost. What dignity of meaning goes on gathering in frowns and laughs which are never observed in the wrong place; What suffused adorableness in a human frame where there is a mind that can flash out comprehension and hands that can execute finely! (221)

一読して明らかなことは、行為の当事者が一体だれなのか、読者は煙に巻かれていることである。ぼかしが入れてあるのだ。ところが文脈に耳を澄ますと、これらの言葉が、意中の人キャサリンの立居振舞に耳目をそばだてるクレスマーの心中を描いたものであることがわかってくる。恋心は隠そうとしても眼の表情、口元のほほえみとなってあふれ出してくる。他動詞“certify”が暗示する行為の主体は

クレスマーである。「やはり、この人は繊細な感受性と洗練された判断力をもっているんだなあ、」というのが、彼の無言の思いである。そっとした言葉に隠された情感が無言のうちに伝わってきて、相手は心を動かされる。否定語と比較級の組みあわせ、

“no sweep of garment or turn of figure is more satisfying than that which enters as a restoration of confidence”は、感情の含蓄が深い。「ドレスの流れるような動き」にも「身のこなし」にも、女性的な優雅さに感動しているクレスマーの思いが感じとれる。

同時に、キャサリンの心に湧きおこる感情の暗示もある。意中の人がこの席にいて、その人には「私の思いは必ず伝わる」(“no intention will be lost”)という信頼感が蘇る(“restoration of confidence”)。この例に見えるように、二重否定は感情の余韻を湛えている。感嘆符で終わる文、

“what dignity of meaning goes on gathering in frowns and laughs which are never observed in the wrong place,”にも余韻嫋々とした情緒が暗示されている。第三者には意味があるともみえないしかめっ面とはにかみの笑いが、意中の人(クレスマー)に見られている(“never observed in the wrong place,”)と思うと、恋慕の情はいやましに募る。キャサリンの思いの深さを“dignity of meaning”と言い表しているが、思いの純粋さがそのまま彼女の人間の品位を暗示する措辞である。

繰りかえされた感嘆詞、“what suffused adorableness in a human frame”は、キャサリンの満腔に恋慕の思いが満ちる上げ潮を暗示している。相手(クレスマー)がまなざしで鋭敏な理解力を返し(“a mind that can flash out comprehension”),ピアノの鍵を操る手の動きで思いを伝えるとき(“hands that can execute finely”),クレスマーの心技体は一つになっている。それが相手の心に届き、こだまを返す。ここには、言葉を、身振り、まなざし、口元の震えなど、身体の働きの延長線上にみる直感がある。エリオットは、言葉の営みを命の営みと捉えていた、言葉を語ることは、知性と感情と肉体を総動員することである、という見方である。ここに、伴侶ルイスと共有していた生理学の知見が生きている。つまり言葉は、肉体と感情と思考のいとなみが調和したとき、生きた言葉になる。<sup>5)</sup>そこに、心と体は一つものとみる心身一如の言語観がみてとれる。

## VI. 感情表現の粹としての恋愛

クレスマーにはフランツ・リスト(Franz Liszt,

1811-86)の面影が窺える。“Klesmer was not yet a Liszt, understood to be adored by ladies of all European countries” (220) この文からも、クレスマーがリストからヒントを得た性格造形であることが察せられる。1854年ドイツ滞在中に、メアリアンは駆け落ちの相手ルイスに紹介されて、リストと直接交友をもつようになった。当時、離婚訴訟のさなかの王妃と同棲中の彼の境遇は、彼女とルイスのそれに一脈通じるものがあった。彼の奔放な生きざまに加えて、そのピアノの技は、メアリアンに鍛錬された音楽的靈感を感じさせたのである。彼のロマン派的感受性と音楽への純粋な献身は、深い感銘をメアリアンの心に残した (*The Journals of George Eliot*, 21)。彼は、音楽をとおして新たな時代精神の創造を志す高邁な信念をもっていた。ドイツ在住のハンガリー人として民族的な負い目をもつ彼は、古典主義音楽擁護派から浴びせられるあざけりを忍ばなければならなかった。エリオットは、リストの苦衷を察して、その強い自負心をも許容的に見ていた節がある。(“Liszt, Wagner, and Weimar,” 84)

非凡と平凡が相半ばするリストの人間性にメアリアンは感銘を受け、これがユダヤ人クレスマーの性格像となって結実したのである。

and Catherine Arrowpoint had no corresponding restlessness to clash with his: notwithstanding her native kindliness she was perhaps too coolly firm and self-sustained. But she was one of those satisfactory creatures whose intercourse has the charm of discovery; whose integrity of faculty and expression begets a wish to know what they will say on all subjects, or how they will perform whatever they undertake; so that they end by raising not only a continual expectation but a continual sense of fulfilment—the systole and diastole of blissful companionship. (222)

男女の親密な触れあいは、お互いの背後にある文化風土をあぶり出さずにはおかない。この引用にも、個人の性格を形づくる環境の宿命的な力が暗示されている。引用の最初の文は、語り手のまなざしが感じられる。“restlessness”は、クレスマーの、現状を変えようとする理想家の志を言いあてた言葉である。一方、キャサリンの、育ちのよさからくるおっとりした善意は、“native kindliness”と表現される。語り手は二人の好意が、お互いに自分が持つて

いない資質に惹かれあう心理に由来していることを捉えている。

“But she was one of those satisfactory creatures”に始まる文には、視点の移動が起こっている。相手に対する「満ち足りた思い」も、その美質を「発見する魅力」も、クレスマーの心中の思いを言葉にした自由間接話法 (free indirect discourse) である。これが、そっと恋心を楽しむ陰影に満ちた情緒を醸している。キャサリンの明敏な感受性と鋭い言語感覚に魅せられた彼は、相手の言葉とピアノ演奏から滲み出てくる心映えと気品に聞き耳を立てている。“they end by raising not only a continual expectation but a continual sense of fulfilment—the systole and diastole of blissful companionship.” この文にもクレスマーの心中が示唆されているが、興味深いことは、“the systole”以下では語り手の視点が忍び込んできていることである。“they”はキャサリンを指しているが、一種のぼかしである。クレスマーの見たキャサリンは、内的生活の豊かさゆえ、付き合っただけに新しい資質が滲みだして、彼に心の触れあいの充足感を味わわせてくれる。この至福のときめきを、“the systole and diastole”と表現する発想は、クレスマー自身の視点ではなく、語り手の背後にいる作家の生理学の知見から出たものである。一つ文の途中で視点を変えることはきわどい技である。これを、語り手のコントロール (narrative control) の揺らぎとみることもできる。これをあえて行うのがエリオットの流儀なのである。「心筋の収縮と拡張」は、命の鼓動そのものの表現である。これを恋の語らいに用いる想像力は、生理と心理が不可分一体の境地であることを喝破したエリオット一流のものである。こういう片言隻語にも、フロイトの近代心理学を予感させる心理洞察が潜ませてある。<sup>6)</sup>

上記引用に続く一節にも、恋愛の当事者の心理的陰影が深い文体が見られる。

Klesmer did not conceive that Miss Arrowpoint was likely to think of him as a possible lover, and she was not accustomed to think of herself as likely to stir more than a friendly regard, or to fear the expression of more from any man who was not enamoured of her fortune. Each was content to suffer some shared sense of denial for the sake of loving the other's society a little too well; (222)



否定語ないしは、否定的な含みをもつ言葉を積みかさねて、曖昧なものを曖昧なままに描く技は、オースティンの文体を思わせる。貴族に雇われた音楽教師たる身分をわきまえたクレスマーは、自分の好意が結婚として実るとは夢にも考えない。一方のキャサリンもまた、自分の容貌が男性にどう受けとられるかを、体験上自覚している。そのため、計算高い野心家が爵位と財産を目当てに近づいてくる可能性があることを心に刻んでいる。だからこそ、純粋な人間的共感を求める気持ちには哀切なものがある。3行目の“fear the expression of more”には、彼女のうち震えるような感受性が仄めかされている。はからいなき魂の触れ合いを憧れる思いは、「おののき」(fear)とも感じられる。“Each was content to suffer some shared sense of denial for the sake of loving the other's society a little too well;”お互いに境遇上の「負い目」を理解しあい、結婚の縁はないものと諦めている。ところが、謙遜な自己否定の思いそのものが相手の心の琴線に触れ、いやましに恋慕がつのってくる。ひとときの触れあいを純粋に楽しめばそれでよい、と自らに言い聞かせる思いが、皮肉にも愛の絆を深める結果になるのである。このような余韻の深い情緒描写は、否定的表現と、“denial”にみられるように、意味の凝縮された抽象語の奥行によって可能となっている。情緒をやどした抽象語の巧みな使い方にも、オースティンの影響があることを偲ばせている。

上記引用の直後の一節にも、語りの視点の移動が起こっている。

and under these conditions no need had been felt to restrict Klesmer's visits for the last year either in country or in town. He knew very well that if Miss Arrowpoint had been poor he would have made ardent love to her instead of sending a storm through the piano, or folding his arms and pouring out a hyperbolical tirade about something as impersonal as the north pole; and she was not less aware that if it had been possible for Klesmer to wish for her hand she would have found overmastering reasons for giving it to him. (222)

最初の文の“no need had been felt”は、受身によって行為の主体がぼかされている。その含みは、キャサリンの両親が、娘と音楽教師の間に起こっていることを察知しながら、娘の「良識」を信じて、

そっとしておこうという思いである。続く假定法の二つの文は、語り手がクレスマーとキャサリンの心の中に入りこんで、心の動きを捉えたものである。假定法の文中の“instead of sending a storm through the piano,”は、事実の示唆がある。忍ぶ恋をこらえつつ、なお狂おしい情熱をピアノ演奏に託して相手に伝えずにはおれないクレスマーのせつなさが感じられる。“or folding his arms and pouring out a hyperbolical tirade about something as impersonal as the north pole;”ここにも、自らのロマン派的な信念を相手に吐露する一途の思いが暗示されている。高邁な理想をいとしい人に語るラテン系の大仰な言葉は、語り手のひょうきんな冷やかし口調を示している。“if it had been possible for Klesmer”以下の假定法は、キャサリンの結婚へ寄せる思いが、本人のなかではっきりとした決意へと実を結ぶ予感をとらえている。“overmastering reasons for giving it to him”「他を圧倒する理由」は、彼女のなかに葛藤がありながら、愛を貫いて異質な世界にとびこんでゆくだけの確信の芽生えを暗示している。

假定法は本来感情の機微をえがくのに優れた表現であるが、エリオットの場合には、とりわけ含蓄深い内面描写に假定法が目立っている。『フロス河の水車場』(*The Mill on the Floss*)のマギー(Maggie)、MMのドロシア(Dorothea)、DDのグエンドレンのように、複雑な精神のドラマを演じるヒロインには、假定法が心の襞をえがく手段としてよく用いられている。ましてや、クレスマーとキャサリンのような鋭敏な感受性のやりとりを描くのに、否定語と假定法が組みあわされて使われるのは自然なりゆきである。

## VII. まとめ

後期のエリオットは、リアリズムの限界をのりこえる表現手段としてさまざまな手法を用いている。クレスマーがユリシーズ(Ulysses)のイメージで描かれている(222)のも、神話・伝説上の人物のイメージ喚起力を生かしたものである。これは、ユリシーズの辿った冒険と流浪の運命を連想させて、読者の歴史的想像力に訴える技である。これと相まって、抽象度の高い重厚な言葉が具体的な文脈に置かれると、意味の多元性が一層きわ立つという道理も、オースティンと共通の特徴である。エリオットの感情表現に独特の切れ味を添えている要素がもう一つある。人物の言葉による自己表現が、しぐさ、目の表情、涙、ほほや手足の震えと同次元で、生理的直観をもって捉えられていることである。つまり、

言葉は心身のいとなみの有機的協働の結果であるという。この洞察が、否定語の積み重ねと仮定法の多用と相まって、曖昧模糊とした人間感情のやりとり生き生きとした息吹を吹きこんでいる。これが読者の想像力に訴え、多層的な意味あいを生みだす力になっている。

エリオットの恋愛描写には、余韻嫋嫋とした情趣の豊かさがある。見おとしてならないのは、個人の魂の濃密なやりとりの背後に、ことなつた文化風土の葛藤があつて、それが一つの歴史社会の実相を浮き彫りにしていることである。個人と個人のかかわり合いのなかに、共同体の有機的生命のネットワークが立体的にとらえられている。クレスマーとキャサリンのドラマは、グエンドレンとデロンダのそれと交差し、作品のテーマを編み出す織糸の役割を果たしていることがわかる。

エリオットは、登場人物の心のドラマを描きだすのに非凡な技を発揮した。心理的陰影に富んだ彼女の文体は、その一端をみてきたように、オースティンのそれに多くを負っている。曖昧豊饒な内的世界を曖昧なままに再現する芸境は、暗示的言い回しと、否定語と、仮定法の駆使によって可能となった。これは、小説のディスコースを言語芸術の域に磨きあげたオースティンの様式美を、朗読によって摂取しようとしたエリオットの努力の結果である。彼女は、19世紀後半の科学的世界観のディスコースを文学に取り入れる挑戦の先陣を切った。その際、オースティンの遺産は、心の曖昧領域を描くうえで、伝統と創造のバランスを取る重しの役割を果たすことになった。

#### 注

- 1) 否定語には下線を、否定的な含みをもつ言葉には網かけを、施している。以下、同様。
- 2) Trevelyan は、18世紀古典主義時代の宗教的気風を、教義解釈における寛容な精神 (latitudinarianism) として特徴づけている。宗教は良識 (reasonableness) が欠けると、救済どころか害をなすとみている。(310)
- 3) David Cecil は、18世紀古典主義時代の支配的な気風がアイロニカル・ヒューモアを生み出す土壌になったことを指摘して言う。  
“Its clear breezy climate of good sense and self-confidence made it an age in which humour flourished. For the most part it was ironic humour. Realists are quick to note any comical difference between pretence and reality, between truth and day-dream; and to

enjoy it.” (15)

- 4) Darwin は、人間の記憶を絶する生命進化のプロセスを推測することによって、先史時代に先立つ悠久の地球的時間の観点で人間の営みをとらえ直そうとする視座を得た。“The mind cannot possibly grasp the full meaning of the term of even a million years; it cannot add up and perceive the full effects of many slight variations, accumulated during an almost infinite number of generations.” (639)
- 5) Thomas Huxley (1825-95) は “Physical Basis of Life” (1868) で、人間の精神活動のシンボルとみなされてきた言語活動を生理学の視点でとらえて言う。“Speech, gesture, and every other form of human action are, in the long run, resolvable into muscular contraction, and muscular contraction is but a transitory change in the relative positions of a part of a muscle. But the scheme which is large enough to embrace the activities of the highest form of life, covers all of those of the lower creatures.” (274) George Eliot は *Middlemarch* (1871-72) の構想と執筆の折、“Physical Basis of Life” を丹念に読み、言語の生理学的基盤を表現する言葉を模索していた。
- 6) Davis は、Darwin の *The Origin of Species* (1859) 以後、人間の心を捉える新たな方法として、生理学・心理学の知見による「心の科学」が形成され、これが George Eliot をはじめ、小説に変革をもたらしたことに触れている。“By connecting the mind with the physical world, science offers new ways of understanding and describing the self, and opens up rich imaginative possibilities for Eliot as a novelist deeply concerned with representing the mind. . . . Regarded as an integral part of the life of the organism, the mind must be open to the influence of inward physical processes and mechanisms, of environmental conditions and of interactions with other organisms,” (4-5)

#### WORKS CITED

- Austen, Jane. *Emma*, eds. Richard Cronin and Dorothy McMillan. Cambridge: Cambridge UP, 2005.
- Cecil, David. *A Portrait of Jane Austen*. London: Constable, 1979.

- Darwin, Charles. *The Origin of Species*. New York: The Modern Library, 1993.
- Davis, Michael. *George Eliot and Nineteenth-Century Psychology: Exploring the Unmapped Country*. London: Ashgate, 2006.
- Eliot, George. "R. W. Mackay's *The Progress of the Intellect*." *George Eliot Selected Critical Writings*. Ed. Rosemary Ashton. Oxford: Oxford UP, 1992. 18-36.
- . "Liszt, Wagner, and Weimar" Ed. Rosemary Ashton. 1992. 82-109.
- . *Middlemarch*. Ed. and Introd. A.S. Byatt. New York: Oxford UP, 1999.
- . *Daniel Deronda*. Ed. and Introd. Graham Handley. Oxford: Clarendon Press, 1984.
- . *The Journals of George Eliot*. eds. M. Harris and J. Johnston. Cambridge: Cambridge UP, 2000.
- Handley, Graham. "Austen, Jane." *Oxford Reader's Companion to George Eliot*. Ed. John Riganall. Oxford: Oxford UP, 2000. 18-9.
- Houghton, Walter E. *The Victorian Frame of Mind, 1830-1870*. New Haven: Yale UP, 1957.
- Huxley, Thomas H. "On the Physical Basis of Life." *Victorian Prose and Poetry*. eds: L. Trilling and H. Bloom. New York: Oxford UP, 1973. 272-87.
- Page, Norman. *The Language of Jane Austen*. Oxford: Basil Blackwell, 1972.
- Tanner, Tony. *Jane Austen*. Basingstoke: Macmillan, 1986.
- Trevelyan, G. M. *English Social History: A Survey of Six Centuries from Chaucer to Queen Victoria*. London: Longman, 1978.
- Trilling, Lionel. "Emma and the Legend of Jane Austen." *Jane Austen Emma: A Casebook*. Ed. David Lodge. Basingstoke: 1991. 118-37.